

デザイン現場におけるスキル Skills in a workplace of designing

松本雄一[†]
Yuichi Matsumoto

[†] 関西学院大学
Kwansei Gakuin University
matsuyu@kwansei.ac.jp

Abstract

This article investigated skills in a workplace of designing. Compared between experts and novices, we discussed an acquisition of skills through situated learning.

Keywords — skill acquisition, situated learning, legitimate peripheral participation

1. 目的

仕事の現場における熟達については、認知的なアプローチから、熟達者と初心者の差異を解明し、領域固有の熟達した認知が熟達の源泉とされる研究が多くなされてきた。他方で状況的認知の観点から、現場における熟達の過程を定性的方法で分析する研究も多い。正統的周辺参加の研究(Lave & Wenger, 1991)においては学習者が実践共同体への参加を深めながら技能を獲得していく様子から、状況的学習の枠組みが提示されている。

本研究ではファッションデザインの現場における技能形成を、おもに新人デザイナーの聞き取り調査を通じて明らかにするとともに、熟達者との技能の差異や、状況的学習によって技能を獲得していく過程について考察した。

2. 方法

調査対象：アパレル企業 A 社のデザイナー・パタンナー・営業担当者、計 18 名(女性 16 名, 男性 7 名)。そのうち入社 5 年以下の新人が 8 名, デザイン部門の責任者が 5 名(入社 12~22 年)。責任者を熟達者, 新人を初心者として位置づけた。

聞き取り調査：1 対 1 の対面形式による聞き取り調査である。質問項目はガイドラインとして用意し、それに基づいて実施するが、重要な点につ

いては詳しい説明を求めて深く聞き取っていく、半構造化インタビュー(May, 2001)が行われた。調査の内容は録音され、後日文書化された。そして熟達者と初心者の聞き取り内容を比較することでその差異を分析した。

デザイン画収集：調査対象が描いたデザイン画をデジタルカメラで撮影し、資料として収集した。熟達者と初心者のもの、あるいは同じ人物の違う年数のものを比較することで、熟達度を考察した。

3. 結果

デザイン画の比較 1：同じ部署に所属する熟達者と初心者のデザイン画を比較すると、熟達者のデザイン画は鉛筆のみで着色がなされていないにも関わらず素材感をうまく表現できていた。それにより短時間で多くのデザイン画を描くことができる。初心者のデザイン画は着色されているが、それがどのような素材でできているかを読みとることは難しかった。次に製品化に必要な事項が注意書きとして盛り込まれていたことがあげられる。初心者の方には使用する素材の名前しか書かれていないが、熟達者のデザイン画には素材の柄や組み合わせ、その比率に至るまでより具体的なものが記してあり、製品のイメージを具体的により伝えることができる。

デザイン画の比較 2：同じ人物の入社以前から 5 年目までのデザイン画を比較すると、入社以前は芸術性をアピールする絵であったものが、入社と同時に実用性を意識した絵に変わっていた。そして 5 年目には顔や手足を簡略化し、複数のデザインを並べて描くなど、熟達とともにコミュニケーションの質が変化していることが読み取れる。

デザインコンセプトの理解：熟達者と初心者のデザイン技能は、基礎的な描画技能の他に、所属部署の「デザインコンセプト」の理解において差がみられた。デザイナーは所属する部署の設定している製品コンセプトに基づいてデザインをしなくてはならないが、熟達者はそれを深く理解している。それは「…を表現していこう」「…を見せていけたら」などの表現から、製品作りに対する明確な意図をもっており、また対象とする顧客層も具体的に設定していることが読みとれる。対して初心者は説明の中に「…といわれている」「…だそうである」というような表現や、また社内他者や一般の意見を援用しており、自身の考えとして成熟していないことが読み取れる。しかし顧客層などの製品作りの上で必要な要素は把握していた。

正統的周辺参加：A社のある部署では職場の掃除も新人の役目として与えられており、それをしっかりとこなすことで新人は部署の一員として認められていた。これは正統的周辺参加(Lave & Wenger, 1991)の典型的な過程ということができるとする。しかし今回の事例では初心者は掃除をはじめとする雑用をこなしながら、同時にデザイン画やコンセプト理解の指導など、職場で鍵となる仕事の指導を受けていた。これは初心者とはいえ基礎的な技能を習得済みであることが影響しているが、参加を深める周辺実践と、技能を高める中心実践という、異なる方向性の熟達の指導が行われていたことがわかった。

熟達における「雑用」の意味：新人は最初、先輩のサポートとして様々な「雑用」に携わっている。それは先述の掃除の他、道具や生地の発注、資料のコピーと整理、荷物の運搬、電話番号などである。しかしこれらの雑用には熟達において将来必要な知識が埋め込まれていた。それに気づかない初心者は雑用に消極的であるが、それに気づいたある初心者は、雑用に対して積極的に取り組み、技能を形成していた。道具の発注により先輩の使う道具を理解し、資料整理から生地の種類や流行のデザインモチーフを理解し、荷物の運搬や電話番号から将来取引をする業者を理解するというよう

に、自分なりの熟達につながる意味づけを行うことにより、内発的動機づけを行っていた。Deci & Flaste (1995)における取り入れ(introjection)と統合(integration)により、熟達をもとにした内在化(internalization)が行われ、内発的動機づけにつながっていたのである。

熟達者の指導：しかし誰でもこのように内在化がうまく行えるわけではない。雑用に埋め込まれた知識に気づかないまま過ごしてしまう初心者もいる。それに対して熟達者は、初心者の気質によってすぐ教えるか、自発的な気づきを待つかを使い分ける指導を行っていた。そしてそれは新人の素質を見極める、早い段階での選別を行っていることも意味している。現場での熟達においては、周辺的な実践の中でも早期に選別が行われていたことが明らかになった。

4. 考察

正統的周辺参加においては熟達とともに共同体への参加を深めていくことが学習の軌跡であるとされているが、デザイン現場における熟達をみると、参加を深める実践と技能を高める実践が必ずしも同一の実践ではないこと、周辺的な実践を誰もが内発的に動機づけられて積極的に行うわけではなく、そこには内在化の過程が必要であること、そして熟達者による初心者の選別も行われていることが調査により明らかにされた。ここから既存の正統的周辺参加による学習の枠組みとは異なる熟達の姿を読み取ることができる。

参考文献

- [1] Lave, J. & Wenger, E. (1991). *Situated cognition: legitimate peripheral participation*. Cambridge: Cambridge University Press.
- [2] May, T. (2001). *Social research 3rd ed.* Buckingham: Open University Press.
- [3] Deci, E. L. & Fraste, R. (1995). *Why we do what we do*. New York: Putnam's Sons.
- [4] 松本雄一(2003).『組織と技能』. 白桃書房.